

教師会研修会発表資料(改訂版)

(改訂の箇所は、3頁中段から6頁上段までを加えました)

(二〇二五年九月五日) 岡本 英夫

十利行満足章(続)

(聖至三四七・三四八)

〔問い〕 何の因縁ありてか「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と言えや。

〔答〕 『論』に「五門の行を修して、もつて自利他成就したまえるがゆえに」と言えし。

(A) 覈求其本釈

この答えをナリに厳密に問うて明らかにするために次の問いを出します。

「然るに、覈こそその本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり。」(覈求

其本釈)

「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」は、自利他成就によつてなる。

それは菩薩の自力の歩みによるのではななく、

阿弥陀如来の本願力によつてなる。このことを『大経』の四十八願に帰り、厳密に確認して明らかにしよつ。

まず、根本の道理として、菩薩の自利の歩みも、利他の歩みも、真なる歩みはどちらも如来のはたらきかけによつてなることを、次のように言ふ。

(B) 他利他の深義

「他利」と利他と、談するに左右あり。もし自ずから仏をして言わば、宜しく利他と言つべし。自ずから衆生をして言わば、宜しく他利と言つべし。いま將に

仏力を談せんとす、このゆえに利他をもつてこれを言つ。當に知るべし、この意なり。」(他利他の深義)

(1) 他利と利他に關しての前提

他利と利他は語が入れ替えられているだけで、意味するところは同じとみられていた。天親にも、この使い方があ

(2) 問題の発見

自らの救い(自利)と他の衆生の救い(他利)を共に表現する大乘仏教は、「自利他成就」が目的となる。しかし、天親菩薩は『淨土論』の中で、「自利他成就」と言つて、「自利他利成就」とは言っていない。そこには深い意味がなければならぬと曇鸞は見た。

(3) 誰が救うのか

自分を救う力のない私たちは、絶対他者のはたらきにより頼らねば救われない。

「自利」とは、自らの救いであるが、自分が自分を救うというだけではなく、絶対他者である阿弥陀の本願が自らを救うことを表わす表現であった。

もし「自利他利の成就」と言われるのであれば、私の力が①私の救い(自利)をなし、②さらに他の衆生の救い(利他)をもなすことになる。しかし現実には、私には私を救う力はなく、ましてや他の衆生を救う力はない。だから、「自利他利の成就」はあり得ないのである。

そこで天親は「自利他成就」と言われた。他利と言わず利他と言ったところに、深い意味がある。「談するに左右あり」。正反対の違いという。べればほべの違いがあつたのか。

「もし自らから仏をして言わば、宜しく他利と言つべし。自らから衆生をして言わば、宜しく他利と言つべし。」

仏をほたらきの主語にすれば、「こゝには直接述べられていないが、前提として仏が「自利」をなす。即ち仏のはたらきによつて私の救いが起こることである。

そして、その私を救った仏のはたらきが、他の衆生にまで及んで、「利他」すなわち他の衆生を救うのである。他の衆生の救いも、この仏のはたらきを受けることによつて初めて成される。「他利」は仏の「利他」によつてはじめて可能となる。

自も他も、すべての者が仏の本願力のはたらきを頂いて救われていく。しかも、他の衆生の救いは、私を救った本願が、私を通して他に回かい、救いをなすためのものとなる。

(4) 何が深いのか

菩薩が歩んで、自らの力で「自利」「自らの救い」と「他利」(他の衆生の救い)を成し遂げることができるとすれば、それは大乘の表現を表わすことになり、大いに称讃されるべきことである。そしてそのような菩薩における強い歩みが求められ、それが大乘仏教の姿であると説かれることにもなっていた。

しかし、我らは凡愚であり、そのような力を持たない者である。この自覚に立つとき、唯一我らを救う絶対他者である阿弥陀の本願ましますことが『無量寿経』に説かれている。「心」で受けとめた天親菩薩は明らかに、あらゆる衆生の救いである往相も、その衆生を通して展開するあらゆる衆生を救うはたらきである還相も、ともに阿弥陀の本願力回向によるものである。

「ごとき、曇鸞は明らかにした。

「深義」とは、端的に言えば、如来の大
悲本願力のはたらきましますというこ
と。そして「これがあらゆる衆生を救う
というごときである」。大乘の眞の仏道
は、自力の菩薩のよう「強く歩む」と
「ころにあるのではなく、如来本願を「深
く頂く」「ごにめるのである。

(5) 親鸞の受けとめ
親鸞聖人はこの「他利と利他と、談ず
るに左右あり……」の文を「他利利他の深
義」と感謝し讃えて受けとめ、「証巻」を
結句御自釈に次のように述べました。

「しかれば大聖の眞言、誠に知りぬ。
大涅槃を証するごとは、願力の回向に
藉りてなり。還相の利益は、利他の正意
を顕すなり。

「ごをもつて論主(天親)は広大無碍
の一心を宣布して、あまなく雑染垢念

の群萌を開化す。宗師(曇鸞)は大悲往
還の回向を顕示して、ねんごころに他利
利他の深義を弘宣したまえり。仰ぎて
奉持すべし、特に頂戴すべし」。

「この前半は直接「証巻」をまとめてお
り、後半の論主と宗師についての言葉
が、「教行・信証」全体を明らかにする
ことができたのは、論主の「一心」と宗
師の「深義」に因るものであることを、
仰ぎ讃えて述べている。

「この「深義」を具体的に本願を挙げて
厳密に問い明らかにするのが次の「三
願的証」の文です。

(6) 「他利利他の深義」についての領解
〈細川巖先生〉

「利は無上菩提を究めて仏となること。
阿耨多羅三藐三菩提を得ること。

「自利利他は、自分が仏になっていく
ことが、他の人を仏とするごことになる。
しかし、これは人間にはできない。で
きるのは、「自利利他」である。自分が如
来の「利他」によって仏となっていくこ
とが、他の人が仏となるごの手助け、
刺激、模範、手本、きっかけになる。「自
の利が「他の利」になる。

仏は「この本願を届けずば、我は正覺
を取らじ」と、本願を抱いて菩薩となり、
はたらきを展開する。「この本願が衆生
の上に届いて信心念仏になれば、仏は
仏になる。これが仏の「自利成就」。その
為の行が五念門の行。「ごの中の往相の
功德を成就して回向すると、本願成就
して、汝が如来・南無阿彌陀仏となる。

衆生の上に南無阿彌陀仏と念仏が生
まれて、衆生は汝なる世界に往生して
いく存在になる。「これが「利他成就」。

法蔵菩薩が南無阿彌陀仏になってい

く、それが自利成就。その時衆生は仏となる道に立つ。これが「利他成就」。自利利他は如来にある。自利がそのまま利他である。…

『回向の宗教』88〜

向であることを曇鸞はよく知っていた。しかし、具体的な回向の主体は人であることを言おうとして菩薩回向を言いつらぬいたのであるまいか。

「彼の浄土に生まると、及び果の菩薩人天の所起の所行とは、皆阿弥陀如来の本願力に縁るがゆえに」。自利の行利他の行は皆如来の本願力から生まれる。「自利利他」が如来大悲を表わす表現である。これを受けとめて聖人は「大悲空住還の回向を顯示して」と「証卷」で言われた。

〈住園夜見先生〉

しかし、曇鸞は「如来回向」と言われなかつた。なぜか。

…「他利」と言つは、他の、弥陀のために利益せらるること。衆生よりして仏を謂いて、他とする。他に利益せらるること訓む。

回向の根源は如来であるけれども、それは具体的にはよき師よき友の上に顕われる。曇鸞にとっては大親菩薩。回向は具体的には天親の回向であることをごとうしても言いたい。回向は如来回

「利他」と言つは、能く他の衆生を利益すること。仏よりしては、衆生を謂いて他となす。他を利すると訓む。それは是くの如し。ゆえに「他利利他は、從仏回生と從生回仏との異で、「他利は衆生の無造作を顕わし、「利他」は仏の造作を指示。俱に他力を顯示するの名なり。

然るに、論に「利他」言つ者は、從仏回生の辺に依る。是において、論文に明す

「今將に仏力を謔せん」とす。是の故に、利他を以て之を言つ。当に知るべし、此の意なり。」

故に知んぬ。其の本を求むれば、衆生の「自利利他」皆是れ仏の「利他」なることを。これ論に「示現」「利」、また「自利利他功德成就」と云う利他の言に就いて、此の釈を作したもつのである。

「他利と利他」と「標」

「若し自ずから仏をして言わば」

「此」論意の決判

若し行者に約すれば、「他利」と云うべしと雖も、今は仏を以て主となす。如来の増上縁力を謔する故に「利他」を以て之を言つ。

若し行者に約すれば、「他利」と云うべしと雖も、今は仏を以て主となす。如来の増上縁力を謔する故に「利他」を以て之を言つ。

若し行者に約すれば、「他利」と云うべしと雖も、今は仏を以て主となす。如来の増上縁力を謔する故に「利他」を以て之を言つ。

仏力ニ所謂、今日阿弥陀如来自在神力なり。

意は、今は將に仏の本を同じうして、未を成したもつての神力を談ぜんとす。故に「利他」と云う。乃ち上の阿弥陀如来を承け来たりて、仏が衆生の為に増上縁となる。是れ「利他」で、此の「利他」に就いて、更に「他利」に対して辯明す。故に、「談ずるに左右有り」というなり。

「当に知るべし、此の意なり」。論の「利他」の言は、是れ他力回回の本源で、此れを宗極となす。故に勧めて当に之を了知すべしとなり。(『論註講義』)

◎延塚知道先生

「利他」とは、仏が十方衆生を利益するという意味。「利他」を成り立たせるのは仏力。

「他利」とは、衆生が仏(他)から利益されるという意味。衆生には利益はないから「他利」と言つべき。

「これまで菩薩が「自利利他」を成就すると述べてきたが、じつはこの「利他」とは、菩薩が他を利益することではなくて、仏が衆生を利益するという意味。「利他」とは仏力をあらわす。阿弥陀如来の本願力によって「利他」が可能になるという意味。

阿弥陀如来の本願力によらなければ、利他は成り立たない。それが曇鸞が「他利利他の深義」に託している大切な意味。曇鸞はどこまでも凡夫の自覚に立つて、人間には利他はないと言っている。

「他利利他の深義」は、浄土から帰つて教化をする菩薩を、自分と見るのか。それとも釈尊を筆頭とする善知識に仰ぐのかの分水嶺になります。(『講讀浄土論註第八卷268』)

(7) 自利利他の成就

「他利利他の深義」の前提と思われるものとして「出第五門」の釈以降に次のようにある。菩薩における自利成就と利他成就の関わりが述べられる。

「出第五門とは、大慈愍をもって一切苦惱の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の園、煩惱の林の中に入して、神通に遊戯し、教化地に至る。本願力の回回をもつてのゆえに。」これを「出第五門と名づく」ことたまえり。…

「菩薩は四種の門に入りて、自利の行成就したまえり」と、知るべし。「成就」はいわく自利満足せむなり。「応知て」いは、いわく、自利に由るがゆえにすなわちよく利他す。「これ自利にあたわずしてよく利他する」にはあらざるな

り、と知るべし。

「菩薩は第五門に出でて、回回利益他の行成就したまえりと、知るべし。」「成就は、いわく回回の因をもつて教化地の果を証す。もしは因、もしは果、一事として利他にあたわざることあることなきなり。」「心知は、いわく、利他に由るがゆえにすなわちよく自利す、これ利他にあたわらずしてよく自利することあるなり、と知るべし。」

「菩薩はかくのごとく五門の行を修して、自利利他して、速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たまえるがゆえに。」「仏の所得の法を名づけて阿耨多羅三藐三菩提とす。」「この菩提を得るをもつてのゆえに、名づけて仏とす。」「速得阿耨多羅三藐三菩提と言えるは、これ早く仏に作ることを得たがゆえなり。」

(C) 三願の証

如来の「利他」のはたらきによつて、凡愚の私が救われていく。そのはたらきは自ずと他の衆生へと伝えられていく。私と、私と共に生きる人々を、このような関連で救っていく如来の本願まします。この深い事実を『大經の本願文』の上に具体的に確認します。

「凡そこれ、彼の浄土に生まるると、及び彼の菩薩・人夫の所起の諸行は、皆阿弥陀如来の本願力に縁るがゆえに。何をもつてこれを言わば、もし仏力に非ずは、四十八願すなわちこれ徒らに設けたまえらん。いま的しく三願を取りて、もつて義の意を証せん。」

願に言わく(第十八願)、「設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂

して我が国に生まれんと欲つて、乃至十念せん。もし生まれずは正覚を取らじと。ただ五逆と誹謗止法とをば除く」と。

仏願力に縁るがゆえに、十念念仏してすなわち往生を得。往生を得るがゆえに、すなわち三界輪転の事を勉る。輪転なきがゆえに、このゆえに速やかなることを得る、一つの証なり。

願に言わく(第十一願)、「設い我仏を得たらんに、国の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずは、正覚を取らじと。」「仏願力に縁るがゆえに、正定聚に住せん。正定聚に住ざるがゆえに、必ず滅度に至らん。もろもろの回伏の難なり、このゆえに速やかなることを得る、二つの証より。」

願に言わく(第二十二願)、「設い我仏

を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、我が国に來生して、究竟して必ず一生補処に至らしめん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鏡を被て、徳本を積累し、一切を度脱して、諸仏の国に遊び、菩薩の行を修して、十方諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行を現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覺を取らじとぞ。

仏願力に縁るがゆえに、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。常倫に超出し諸地の行現前するをもつてのゆえに、「このゆえに速やかなることを得る、三つの証ない。」これをもつて他力を推すのに増上縁とす、つかひねんことを得むや。

厳格に把握された内容を見みると、

(1) 自利を成就するために

① 障善となることは 三界輪転。これを克服するのは 往生。

これを生み出すのは 十念念仏

これは 仏願力に縁る(第十八願)

② 障善となることは 回伏の難。

これを克服するのは 滅度に至る

これを生み出すのは 正告聚に住す

これは 仏願力に縁る(第十一願)

(2) 利他を成就するために

障善となることは 常倫にとどまり、諸地の行顕わねず。

これを克服するのは 普賢の徳の修習。

これは 仏願力に縁る(第二十二願)

親鸞は「このように、凡夫である菩薩

の上に大乘の実現である自利利他が可能となる根拠を、四十八願の中の第十

八願・第十一願・第二十二願の三願の上に厳密丁寧に見出した。

親鸞はこれに教えられてか、自利利他の内容をもっと少し詳しく「教・行・信・証・真仏土化身土」で表わし、それぞれの成立根拠となるものを十七願・十八願・二十一願・二十二願・十二願・十三願・十九願・二十願で明確に表わした。『教行信証』作成は、親鸞聖人における「覈求其本」の作品と言えるかもしれない。

(D) 他方に身を任せよ

自力と他力の姿を表わし、他力に身を任せるところを勧めます。(自力他力釈)

自力とは、三途の苦しみを怖れ、禁戒を守ろうとし、守って禪定を修し、禪定によって神通力を身につけ、神通力に

よってあらゆる世界に遊行するようなもの。これは自力の道である。

他力とは、ロバに跨がっていけないような劣夫も、転輪聖王の行列に従っていきさえすれば、虚空に昇ってあらゆる世界に遊び、障害は何もない。これが他力の道である。

愚かなる学者よ、仏法を学んで自分の中で勝手に考えることをせず、他力の乗すべきを聞いて信心を起させよ。

(E) 『浄土論』註釈の意味

『浄土論』の最後の文は、「無善無修多羅優婆塞捨念願生徧、略して義を解し竟んぬ」です。この文で終わるのですが、曇鸞の註釈の意欲は止まず、次の文を加えます。

『経』の始めに如是と称す。信を彰して能人と為す。末に奉行と言ふことは、服膺の事を表し已んぬ。

論の初めに帰礼することは、宗旨に由有ることを明かす。終わりに義竟と言ふは、所詮の理を明示し畢んぬ。述作の人殊なれども、茲において例をなす。」

経の初めには六事成就が説かれ、その第一が「如是」、信成就です。『大智度論』冒頭に「仏法の大海は信を以て能人とす」と龍樹が述べたように、信心から始まります。『浄土論』言えば、「一心」です。

経の最後には「奉行」とあり、服膺と表わして教えを身につけたことが説かれます。『浄土論』で言えば、他利利他の深義を二願の上に頂いたことでしょう。

『浄土論』の始めに「帰礼帰命と礼拝」とあるのは、自らが説く宗旨に確かな由るべきものがあることを明らかにしていることであり、

終わりに「義竟」とあるのは、その宗旨の道理を具に説き終わったということ。

『経』を述べた人と、『論』を作った人とは異なっているとしても、両者の趣旨が一致していることは、『浄土論』を註釈してみても、これがまことにそのよき実例であることは明らかである。

『大経』と、これを優婆塞捨念願した『浄土論』両者に出遇って、曇鸞は、そこに流れる信心の教えを頂き、深く如来の本願の具体相に分け入り、本願力回向に生かされる者となった。

この曇鸞の営みに出遇った親鸞聖人は、仏法の二大中心は信心を頂くこと

と本願のはたらきを具体的に受けとめることであること、¹⁾「証卷」²⁾の「

「³⁾」をもつて論主(天親)は広大無碍の一心を宣布して、あまねく雑染垢忍の群萌を開化す。

宗師(曇鸞)は大悲往還の回向を顕示して、ねんごろに他利利他の深義を弘宣したまえり。仰ぎて奉持すべし、特に頂戴すべし」。

と述べられた。

仏法の道は、造悪の群萌であること、⁴⁾目が覚めて、如来本願を丁寧⁵⁾に頂くことであると明らかになれたように思われます。